

2月1日、東京大学・本郷キャンパスにて、ロシアの著名な映画評論家アントン・ドーリン氏の講演会が行われました。主催は東京大学文学部スラヴ語スラヴ学研究室（楯岡求美教授）で、日本語通訳は吉岡ゆきさん、モデレーターは守屋愛さんが担当しました。2022年2月のウクライナ戦争開始後いち早く抗議の声を上げ、現在はラトビアのリガを中心に活動しているドーリンさんの話を聞こうと、会場の法文2号館の大教室はほぼ満席。150名以上の聴衆で埋まり、戦争下のロシアとウクライナの映画産業や映画人たちの動向について、ドーリンさんの話に耳を傾けました。講演後の質疑応答はとても活発で、日本に住むロシア人参加者からもさまざまな意見や質問が出ました。

以下は、ドーリンさんの講演と質疑応答の内容です（文責；編集部）。

映画評論家 アントン・ドーリン氏 講演会/25年2月1日

講演録

『逃走と沈黙』～ロシア映画と戦争

はじめに

「すべての種類あるいはすべての形態の芸術の中で、われわれにとって最も重要なものは映画である」。

これは、ロシア革命の指導者ウラジーミル・レーニンの言葉です。この言葉をレーニンが本当に言ったかどうかは若干疑問ですが、そのことはさほど重要ではありません。重要なのは、権威主義あるいは権威主義国家にとって、これは20世紀においても21世紀においてもそうですが、映画芸術というものは最も重要かつ危険なパロディの形態であるということです。

映画は芸術の一つのジャンルですが、これは人々が誰でも見ることができる、人気のある芸術です。だからこそ、その制作者が国家に反対の立場を取る場合には、国家にとって危険な芸術であると言えます。反対に制作者が国家の意図に沿う形で作品を作った場合、それが国家のプロパガンダ（政治宣伝）に都合のよい形で仕上がった場合には、国家にとって映画はとても有益なものでした。ただし、そもそも制作者がどのような意図をその映画に込めたのかということは重要ではありません。というのは、真の芸術というものはいくつもの非常に多くの解釈を可能にするからです。

日本映画の中の戦争

今回の私の日本訪問は、最近出版した本の宣伝のためのものでしたが、本日このような形で講演する機会を与えていただいたことに感謝いたします。私も私の家族も、日本と日本



文化にとっても強い結びつきを持っています。ソ連崩壊後に日本映画についてロシア語で書かれた最初の本は、北野武監督の作品についての私の論評でした。日本の映画文化とロシアの映画文化との結びつき・関連というものを、私は長年考えてきました。日本の映画文化が戦争というテーマをどう考え、映像に反映し、表現してきたかということにも関心を持ってきました。

「ゴジラー1.0」(ゴジラマイナスワン/2023年11月公開)という映画があります。昨年、アメリカのオスカー（第96回アカデミー賞）で「視覚効果賞」を受賞した作品で、これはすでに何十本も撮られている怪獣映画の一つですが、しかし、生き残った者の罪の意識、破壊と殺戮の戦争の中での人間というものを反映した映画作品の一つの例でもあります。

熱核戦争、そして熱核戦争に関連したアルマゲドン（世界の終わり）というテーマですが、大変悲しいことに、現在、

それは焦眉の課題になっています。昨年のオスカーではクリストファー・ノーラン監督の「オッペンハイマー」が作品賞、監督賞などいくつもの賞を獲得しました。その数ヶ月後に開催されたカンヌ映画祭のポスターは、黒澤明監督の「8月のラブソディー」（1991年5月公開）からデザインされたものでした。「8月のラブソディー」は、長崎の原爆をめぐる映画であることはもちろんですが、私たちが住んでいるこの環境をどう未来に残すのか、今をどう生きるのかという意味でも、世界の映画史に残る傑出した作品の一つであると思っています。

「映画と戦争」「私自身と祖国ロシア」について

ということで、守屋愛さんから「講演のテーマは何にしましょうか？」と問われたときに、私は「映画と戦争」というテーマをごく自然に選びました。

しかしながら、今日の私の話は、映画評論家あるいは映画研究者として戦争をテーマとした映画作品を分析してみせる、というような内容ではありません。私が話したいのは、映画芸術、映画だけではなく他分野も含めて芸術というものが、現在ロシアがウクライナで戦争を行っている下で、どのような状況にあるのか、どのような役割を果たしているのかについてです。そしてロシアについて、私自身と私の祖国について語るということも、本日の私のテーマです。私自身について語ることは、ごく個人的なケースではありますが、現在の状況の中では、ロシア文化の文脈の中で生きることがない人たちにとって興味を持ってもらえることだろうと思います。

2022年2月24日の朝のこと

この地球上に住む何百万人のロシア語話者の人たちと同じように、私はロシアがウクライナに侵攻を始めた2022年2月24日の早朝のことをよく覚えています。

この日、私は朝早く目を覚ましました。家族は皆まだ寝ていました。というのは、私はこの日ボルガ川の畔にある大きな都市サマラに飛んで、映画について講演をすることになっていたからです。ニュースを聞いて、私が最初に衝動的に思ったのは、「今日の講演は中止にすべきだ。そのような講演はもう誰にも必要ないし、私自身にとっても必要ない」ということでした。しかし、これは非常に強いショックを味わった人間が概して取る行動ですが、既定の日程をあらかじめ決めた手順通りにこなすという行動を、実は私はここで取ってしまいました。結局、私は荷造りをして空港へ向かったわけでは

ありません。空港に着いた時、空港にいるすべての人々が非常に驚いたような表情をしていたことを覚えています。つまりあの時点で、人々はまだ自分の感情を隠すという術を身に付けていなかったのです。嫌なこと、嫌な考えから逃げるといった術を人々はまだ身に付けていなかった。すべての人の表情から、何かとてつもなく恐ろしいことが起きてしまったと感じていることが読み取れました。

「戦争は悲劇であり、戦争は犯罪である」

サマラに着いた私を出迎えてくれたのは、現地の映画館の人たちでした。私は、出迎えてくれた人たちにこう言いました。「今日の私のレクチャーでは、映画については話しません。私は今日始まった戦争について話をします。もし反対と言うのであれば、私はすぐ飛行機に乗ってモスクワに帰ります」。幸いなことに、反対はありませんでした。

その日、私が一番強い印象を受けたのは、「すべてが失われたわけではない」ということでした。私は、講演で「戦争は悲劇であり、戦争は犯罪である」と言いましたが、私の言葉に反論した人はいませんでした。私はかなり厳しい言葉で語ったのですが、聴衆は私の言葉に好意的に反応し、拍手までしてくれました。そこで私は、自分の意見をより多くの人々に表明すべきだと考えました。つまりインターネット上の私のオーディエンス（聴衆、観客）に向かって、私の意見を表明すべきだと考えたのです。

翌日、私は空港でモスクワに帰る飛行機を待っている間に、友人や映画関係者など多くの人に電話をしました。

「YouTube にビデオをアップしよう。みんなで録画しよう」。いろいろな反応がありました。参加すると言ってくれた人、嫌だと断った人、迷っている人たち…。それぞれが様々な理由を挙げました。とはいえ、YouTube ビデオを撮影するのに十分な人が賛同してくれたので、私たちはすぐにビデオを作り上げ、翌日には YouTube にアップしました。約 50 万人が視聴してくれました。

そこで私は、次は直接観客に向けてアピールするべきだと考えました。その舞台として私が考えたのはモスクワの映画館です。ちょうど、ハリウッド制作映画「バットマン」のロシアでの公式公開が予定されていて、私とそのオープニングで司会をすることになっていました。会場は、モスクワで最も有名で最も大きな映画館「カーロ・オクチャーブリ」（客席数 1500）です。皆が「バットマン」のロシア公開を心待ちにしていたので、チケットは完売状態でした。私は、映画館の舞台上から「この戦争に私は反対だ。皆さんも賛同してください。一緒に『戦争反対』と表明してください」と呼びかけるつもりでした。しかしながらそれは実現しませんでした。なぜか？「バットマン」のロシアにおけるオフィシャル上映が中止されたからです。ハリウッドのメジャー映画スタジオは、わずか 2 日間のうちにロシアからの完全撤退を表明し、実際にそう行動しました。ということでバットマンはオフィシャルな形でロシアから立ち去ったのです。

「ロシアの敵」とみなされ国外へ

それから 2~3 日の間に、非常に抑圧的な法律が制定されました（「ロシア軍に関する虚偽の情報を広める行為を禁止する法律」=違反した場合、最長 15 年の禁固刑）。これによって、戦争に反対する行動が禁止されるだけでなく、戦争という言葉自体が取り締まりの対象になりました。並行して、

SNS でいくつもの脅迫メッセージが送られて来るようになりました。それは、戦争に反対し続けるならば、私個人だけでなく、私の親しい人、私の家族そして何よりも私の子供たちの身に危険が及ぶぞという内容でした。事態は急スピードで展開していきました。侵攻の前日に、「あなた方はロシアから出ていくつもりか？」と聞かれたら、私も妻も子供たちも 100%の自信をもって、「いいえ、ロシアを立ち去る気持はありません。私たちはずっとここで暮らすつもりです」と答えたいと思います。しかしながら、侵攻が始まってから 10 日後に私たちはロシアを出国しました。すでに国際航空券の購入が不可能だったので、鉄道で移動し、そして徒歩で国境を渡りました。その時点では出国は一時的なものだと私たちは思っていました。それからほぼ 3 年経ったわけですが、この間私は一度もロシアに戻っていません。出国の 8 ヶ月後に、私は「外国の代理人」と国から認定されました。つまり私は公式に「ロシアの敵」とみなされたわけです。ロシアの現在の法制度の下では、私は犯罪者なのです。

「戦争は 2014 年にもう始まっていた」

このようなドラマティックな出来事には、もちろん前史というものがあります。全ては 2014 年のクリミア併合から始まりました。その当時、ロシアの政治的な検閲ははるかに弱いものだったので、何十万人の人々が併合に抗議しました。しかしながら、他のより多くの人たちはこの事態を歓迎しました。

抗議を行った人たちの中には、映画関係者、映画作家たちも数多くいました。特に独立系の映画、国際的な映画祭に作品を出展するような人たち、いわゆる作家主義の映画製作者たちが多く抗議に参加しました。抗議文を作成して署名をしたり、ウクライナの映画関係者を心から支援するアピール文に賛同したりする人もたくさんいました。もちろん私もその一人だったわけです。

22 年 2 月に侵攻が始まって以降、相対立する陣営から聞こえてきた台詞は次のようなものでした。「これまでの 8 年間、あなたは何をしてきたのか」。プーチン政権を支持する人と反対する人の間では、この台詞が異なった意味を持っていました。プーチン支持者たちは、「この 8 年間、ウクライナ当局はロシア語話者を抑圧し弾圧してきた」と。これがウクライナに侵攻する口実の一つになったわけです。

プーチンに反対する人たちが同じ台詞を言う時は、全く違う意味を持っていました。つまり「戦争は 2014 年にもう始まっていた」ということです。

オレグ・センツォフ監督の冤罪事件

この戦争がすでに始まっていたことを立証する事件があります。オレグ・センツォフというウクライナ人映画監督が、2014 年の 5 月にクリミア併合を批判したかどで逮捕され、テロ攻撃の計画という冤罪で 20 年間の実刑判決を下された事件です。私はオレグ・センツォフのロシアでの裁判で、弁

護側の証人として証言しました。センツォフを支持した私の行動は、同じ映画人としての連帯行動であり、それと同時に私自身の市民としての政治的立場を表明する行動でもありました。

その当時は、例えばモスクワの大統領府の前で、ウクライナ語で「政治犯を釈放せよ」と書かれたポスターを持って抗議行動を行うことが可能でした。一方でそういう行動に参加しながら、他方では国営テレビ局や国営ラジオ局の番組に出演して新作映画を紹介するといったことも出来ました。

しかしながら、2022 年になる頃には、それは非常に困難になっていました。そして、侵攻が始まると、こういった行動は瞬時にして不可能になりました。かなり控えめな表現で、例えば「NO WAR」(戦争はダメだ)と、たった一つの単語を出しただけでも拘束されるわけですから、プーチン政権に反対する行動がとれなくなってしまったのです。

オレグ・センツォフ監督は、その後私たちの努力もあって釈放され、今回の戦争が始まる前にウクライナに帰ることができました。現在、彼はウクライナ軍に参加して、その一員として戦っています。

戦争はロシアとウクライナの映画にどう反映されたか

このように、政治的な断絶あるいはロシア社会の裂け目というものが始まったのは、2014 年のクリミア併合がきっかけでした。これが映画においてどのように反映されたかを追ってみるのは興味深いことです。

ロシア映画界もウクライナ映画界も、ソビエト連邦あるいはソ連映画の継承者です。ロシアで作られた映画にもウクライナで作られた映画にも、戦争をテーマとした作品が数多くあります。その中には国内外の映画祭で受賞した優れた作品もあれば、単に国の政治宣伝に沿って作られ今日では古びて見るに堪えないものもあります。その両方がどちらの国の映画界にもあります。

2014 年以降ウクライナにおいては、映画制作者は新しい戦争映画を模索するようになりました。そういった作品の特徴は、ドラマであるということ、少ない予算で作られた作品であるということ、そして人々にとっても、作者にとっても、自らの痛いところを突いた、常日頃思い煩っていた問題を鋭く捉えた映画作品であるということです。それは 21 世紀に生きる私たち、特に若い世代の「内なる葛藤」、コンフリクト(対立、緊張状態)というものを追求する作品です。私たち、特に若い人たちが、とても原始的な戦争というもの、殺戮と憎悪というものに直面してしまった時どうなるか。敵を探すことに人々が血眼になる、自分の隣人の中にまで敵を探そうと血眼になるといった状況を反映した映画作品です。

ここでは 3 つだけ作品名を挙げておきます。ヴァレンチン・ヴァシヤノヴィチ監督の「アトランティス」(2019 年)、ナタリア・ヴォロジビト監督の「悪路」(2020 年)、セルゲイ・ロズニツァ監督「ドンバス」(2018 年)。どの作品も世界の権

威ある映画祭に出展され、賞をとっています。ほかにもたくさん作品があります。これら作品の舞台は現代であり、「アトランティス」にいたっては未来の舞台設定です。

2014 年以降のロシアの戦争映画の特徴

ロシアにおいても 2014 年以降、戦争映画が以前より多く作られるようになりました。ロシアで作られている戦争ものは、そのほぼすべてがブロックバスター（巨費を投じて興行的に大きな成功をめざす）作品で、特撮を駆使したものです。その内容は必ずドイツ・ファシストとの戦い、つまり舞台設定が過去である作品です。

ウクライナで作られる戦争映画が自分たちの内なるコンフリクトというものを題材としているのに対して、ロシアで作られる戦争映画は外部とのコンフリクトです。外部の相手は敵であり、敵と戦って、それを殲滅する、勝利するという内容です。

ロシアの戦争映画には、人々から募金を集めて作った国民的な映画というものもあります。「28 人のパンフィーロフ軍団」(邦題「パトリオット・ウォー ナチス戦車部隊に挑んだ 28 人」/2017 年 7 月公開) という作品です。この作品の成功の後すぐに、国が戦争映画に国家予算から多額の資金を投入するようになりました。ロシアの戦争映画の中には、正月の娯楽映画のジャンルに入ることを意図したような作品もあります。例えば、アレクセイ・シドロフ監督の「T-34」です。独ソの戦車戦を題材にした映画ですが、「T-34」は日本でも公開され(邦題「T-34 レジェンド・オブ・ウォー」/2019 年 10 月公開)、かなりの収益を上げました。

映画「スターリングラード」

ロシアの最近の戦争映画で特に予算が大きかったものの一つが、フョードル・ボンダルチュク監督の「スターリングラード」(2013 年 9 月公開) です。これは IMAX (アイマックス/高解像度カメラ) で撮られた作品で、ドイツ人俳優やアメリカ作曲家も駆使した、いわばロシア版ハリウッド映画と言えるものです。

映画「スターリングラード」は過去を題材としていますが、それを現代化してもいます。なぜなら、この映画の主人公は、福島原発事故で人々の救助にあたるレスキュー隊員だからです。つまり、戦争は天災と同じ扱いになっています。戦争は、その中で人間一人一人の質とモラルが問われるものではなく、あらゆる人が巻き込まれる天災であるという扱いなのです。

興味深いことに、この「スターリングラード」という戦争映画は、当時の現実を反映した映画ではなく、その空气中に漂っていた近い未来を予測した映画でした。この映画が公開されたのは、2013 年のクリミア併合の文字通り前年でした。

さて、映画「スターリングラード」のプロデューサーはアレクサンドル・ロドニャンスキーです。彼は、ロシアの映画界でとてもパワーのあるプロデューサーで、例えばアンドレ

イ・ズビャギンツェフ監督の映画プロデューサーを常に務めてきました。そして物事が起きた時には、これまた力強く抗議を行う人でもあります。アレクサンドル・ロドニャンスキーは、2022 年 2 月のウクライナ侵攻でプーチン政権を強く非難して、国を出ました。現在はロドニャンスキーもまたロシア当局から犯罪者つまり「国家の敵」と公式に認定されています。

実はこのロドニャンスキーがプロデュースしたある映画が、2022 年のウクライナ侵攻より前に、この侵攻を予見していました。それは、アンドレイ・ズビャギンツェフ監督の「ラブレス」(2018 年 4 月公開) という映画です。この作品の一つのテーマは夫婦の離婚で、これは戦争のメタファー（暗喩）です。最も親しかった肉親が分かれるということ、つまりお互いに親しい民族、親しい国である人たちが別れてしまうというのがテーマだったと言えます。

映画「セバストーポリ攻防戦」関係者たちの戦争

クリミア併合後のことになりますが、2015 年にロシア・ウクライナ合作映画の最後の作品が公開されました。「セバストーポリ攻防戦」という戦争映画(邦題「ロシアン・スナイパー」2015 年 10 月公開)で、監督はセルゲイ・モクリツキーです。この映画の脚本を書いたロシア人は、作品の公開 8 年後に志願兵としてロシア軍に入隊し、バフムトをめぐる戦いで戦死しました。編集を担当したウクライナ人はウクライナ軍に入隊していて、やはり同じ 8 年後に東部戦線で戦死しました。この映画のプロデューサーであったナターリヤ・モクリツカヤ、この人はロシア国内に映画館ネットワークを持っているのですが、自分の所有する映画館の一つで、兵士を集める「徴兵部」(軍事委員会と呼ばれる)を開設しました。

今とりあげた一つの映画のケースは、私たちがこれまで持っていた考えがいかにか幻想であったかということをよく表していると思います。一連の事実は、「芸術は人々を一つにする」「プロフェッショナル同士の連帯は戦争反対のパワーになる」という考えが幻想であったことを裏付けたのです。

そして、2022 年以降の状況では、ロシアで制作される戦争映画(過去の戦争を題材にしたブロックバスター映画)とウクライナで制作される戦争映画(真の戦争とは何かを追求しようとする作品)との、二つの間の断絶がより明確で、よりラジカルなものになりました。

歴史上最も「映画うつりのよい戦争」

そもそも今回の戦争は、歴史上最も「映画うつりのよい戦争」であると私は思います。

すべての戦闘参加者、戦争の目撃者、そしてすべての犠牲者のポケットに、相当性能の良い撮影カメラがある。同時に性能の良いスクリーンがある。そういう意味で史上初めての戦争だと私は思います。

ウクライナの戦争現場を映して初めてアメリカのオスカーを受賞したのが、ミスティスラフ・チェルノフ監督の「マ

リウポリの 20 日間」(2023 年 4 月公開)でした。昨日、アメリカのサンダンス映画祭が終了したのですが、そこで監督賞を受賞したのは同じチェルノフ監督の撮った「アンドレイエフカまでの 2000 メートル」という作品です。10 日後に開幕するベルリン映画祭に参加するウクライナ映画は 4 本ありますが、全てドキュメンタリー作品であり、全て戦争映画です。そのうちの 2 本は、それまでずっと劇映画を撮っていた監督による初めてのドキュメンタリー映画です。つまり劇映画からドキュメンタリー映画への移行がウクライナでは起きています。

戦争下のロシア映画産業

一方ロシアに目を向けてみると、ウクライナ戦争の開始後、制作される映画の本数は急激に少なくなりました。これは決して驚くべきことではありません。というのは、2022 年 2 月以降、ロシアにおいては「戦争」という言葉自体が禁じられたからです。

「バットマン」をはじめとするハリウッドのブロックバスター映画がロシアから消えてしまったので、私を含む多くの映画関係者は、ロシアの映画産業は衰退するのではないかと、少なくとも向こう 1 年間は衰退すると予測していました。しかしこの予測は間違っていました。開戦一年後の新年つまり 2023 年の正月休みに公開された新作映画はロシア史上最高の観客者数と収益を集めたからです。ロシア映画の大作「チェブラーシカ」です。これはソ連時代(1969 年)に最初のアニメが作られた「おとぎ話映画」の新作です。販売されたチケット数は 2200 万枚でした。

「チェブラーシカ」はコンフリクトが一切存在していない映画です。本当に甘い、文字通り甘いおとぎ話です。なぜ文字通り甘いのか。映画のテーマは、二つのお菓子工場の競争、大きなチョコレート工場と小さなチョコレート工場の対立だからです。

この作品を通して流れているテーマは、真実あるいは本当に大切な問題というものを口に出来ない、相手と話し合うことをしない、ということです。そして主人公の一人である 6 歳の男の子は、そもそも言葉を発することができない、喋ることができない少年という設定になっています。つまり、社会全体が沈黙せざるを得ないというトラウマがこの映画には表れていると思います。しかし、監督や脚本家をはじめこの映画の制作者たちがそれを意図して作った映画とは思いません。おそらく意図せずしてこういう作品に仕上がったのだと私は考えます。

ロシアを覆う「おとぎ話映画の波」

今では、おとぎ話がロシアで作られる映画の主流となっています。それらは皆、ロシアを舞台にしたおとぎ話です。例えば、世界的に有名な「オズの魔法使い」やアンデルセン原作の「火打石」といったお話も、全てロシアが舞台のロシアのおとぎ話として作られています。しかも、おとぎ話映画を

見る観客は、子供あるいは子供連れ家族に限定されるわけではありません。

かといって、こういった映画作品が全く政治的な内容を欠いているとは言えません。例えばロシアの昔話として有名で人気のある「カワカマスの命令により」という映画は、ソ連時代から何回か作られていましたが、その新作が最近公開されました。主人公はエメーリヤという若い男で、言葉をしゃべる魚の力を借りて、いくつかの願い事を叶えていきます。最後に彼が何をやってのけるかということ、なんとイギリスの王家がロシアを侵略しようとしているのを撃退して、ロシアを侵略から守ったという話になっているのです。

「ブレーメンの音楽隊」という作品が最近公開されました。盗賊一味がブレーメンの町を侵略し、我が物顔に振舞おうとするのを、動物たちが町を守り、もとの王様が再びこの町を治めるのを助けるという映画です。アンデルセンの「火打石」という作品をもとにした映画では、原作を変えてしまって、主人公である兵士が前線で戦っている時に、恐怖に駆られて逃げていく。しかしその後後悔して、再び祖国を守るために前線にもどるといった内容になっています。

「現実逃避」とソ連時代へのノスタルジー

ということで、文字通り「おとぎ話の波」がロシアを覆う事態になっています。その理由はいくつか挙げることができます。まず一点目は、多くの人々が逃げ込むところを求めている「現実逃避」の気分です。第二に、これは「社会の幼児化」を表しています。そして第三に、ハッピーエンドを求める非合理的な願望、あるいはハッピーエンドを信じたい気持ちです。

その背景にあるのは、ソ連時代(ソ連という帝国)へのノスタルジーです。というのは、こういったおとぎ話の題材そのものは昔から広く知られていたもので、原作がソ連以外の作者のものであっても、ソ連時代に何回も作家たちによって語り直され、映画化された作品であって、いわばソ連時代の貯金箱の中身です。つまり、人々はおとぎ話という一種のタイムマシンに乗って、ノスタルジックなソ連に舞い戻ることができるという仕掛けになっているのです。今やロシアの多くの観客にとって、ソビエト時代はもはや想像の世界に属しています。ソ連解体から 34 年。若い観客の多くはソビエト時代にまだ生まれてなかったか、あるいは非常に幼かった人たちです。そういう人たちにとっては、ソビエト時代のノスタルジーというのはなお一層心地よいものです。

チェブラーシカは、ソ連時代の児童文学者エドワード・ウスペンスキーの絵本に登場するキャラクターで、それがアニメ化されて大人気になったのですが、一種の「ソ連版ポケモン」と言えるかもしれません。いずれも想像上の生き物です。興味深いことに、この想像上の生き物であるチェブラーシカがロシアのウクライナ軍事侵攻、ロシアの公式用語でいう「特別軍事作戦」のシンボルとなってしまっています。というの

は、軍人は迷彩服に部隊のシンボルを縫い付けたりするのですが、そういったシンボルの一つとしてチェブラーシカが使われており、そのスローガンが「отчебуррахнуть」（オト チェブラーフヌチ）※。チェブラーシカという名前の動詞形です。もともとチェブラーシカというのは「ひっくり返る」「ぼったり倒れる」という意味から来ているので、「相手をやっつけろぞ！」というスローガンとともにチェブラーシカが迷彩服に縫い付けられる事態になっています。

「自己検閲」、しかし予期せぬ効果も

ロシア映画がおとぎ話に傾斜する事態の背景にあるのは検閲（あるいは自己検閲）です。ロシアで映画作品を公開するためには、当局から許可証をもらわなければなりません。ライセンスの発行が拒否されると映画を公開することができません。ライセンスをほぼ確実に取ることができるのが昔話、おとぎ話なので、プロデューサーたちは自己検閲の結果として、ハードルの低いおとぎ話映画の制作へと流れているわけです。

ただし、「おとぎ話の波」の予期せぬ効果というものも実は認めることができます。どういうことか？ 特別軍事作戦を露骨に賛美する映画はほとんどロシアで作られていないという現状です。

「目撃者」という映画がロシアで作られました。これはロシア軍がキエフ近郊で起こした「ブチャの虐殺」を扱っています。「この虐殺は実はフェイクであった、ロシア軍は全く関わっていない」と主張する映画です。しかし、この映画は公開されたものの、全然人が入りませんでした。というのは、人々は毎日のようにテレビやニュースでプロパガンダを聞かされているので、わざわざお金を払ってプロパガンダ映画を見に行ったりはしなかったのです。

新作映画「巨匠とマルガリータ」がもたらした希望

では現状において、ロシアの映画界は全く明かりの見えない闇なのでしょうか？ そうとも言えないと思います。

昨年、ロシアの映画界で非常に話題になったのが新作映画「巨匠とマルガリータ」の公開です。監督はミハイル・ロクシン。彼はロシアとアメリカの二重国籍を持っている人です。そして、プーチンが始めた戦争にはっきりと反対を表明した人でもあります。当局の様々な妨害にもかかわらず、この映画は完成にこぎつけ、公開されました。ブルガーコフの「巨匠とマルガリータ」は、ロシアの 20 世紀文学作品の中でも一番人気のある長編小説ですが、この新作映画「巨匠とマルガリータ」は公開されると大変な人気で、オフィシャルな観客数は数百万人にのぼりました。

この映画の脚本は、ミハイル・ロクシンとロマン・カントルが共同で書きました。これはブルガーコフの小説の最初の優れた映画化だと言えるでしょう。映画の舞台は 1930 年代のモスクワです。ある著名な作家が思想的理由でソビエト作家同盟から追放される。政治的に全く無力な作家は、新しい

文学作品を書く。作品の舞台であるモスクワに悪魔の一軍が降り立つと、作家自身と愛人のマルガリータも作品世界に入っていく。作家は、想像の世界に没入することによって現実には打ち勝つという内容になっています。

ロシアの人々が、新作が公開されたと言って映画館に急ぐ姿を見る時、彼らは単にこの閉鎖的な現実から逃避するためだけに映画館に行くのだとは考えたくありません。つまり、映画の中に作り上げられた空想の世界というものが、現実には打ち勝つ、そして物事の推移を変える手助けをしてくれるのではないか、新しい未来を作るために力を貸してくれるのではないか、そういう気持ちも込めて映画を見ているのだと私は思いますし、それが私の希望です。

* * *

本日お話したようなロシア映画界の最近の動きと現状について、私は昨年刊行した「Bad Russians (悪いロシア人たち)」という本に詳しく書きました。私はこの本を 1 年かけて書き上げました。これは、ここ 20 年間のプーチン政権において映画がどのような形でプロパガンダに利用されてきたかということ、多くの事実を挙げながら考察した本でもあります。現在はまだロシア語版だけしかありませんが、いつの日か日本語版も出版されることを私は期待しています。



<質疑応答>

—— ウクライナの戦争映画について、ヴァレンチン・ヴァシヤノヴィチ監督の「アトランティス」の名前が出ましたが、同監督の「リフレクション」はどう評価されますか？ また、この映画のプロデューサーもウクライナ戦争で兵士として前線に行っていると聞きましたが…。

ドーリン ご指摘の通り、この映画のプロデューサーと制作陣の何名かは前線に行っています。先ほど紹介したオレグ・センツォフ監督と同様です。ということで、ウクライナの映画界においても、病理的な状況というものが同時に存在しています。

映画「リフレクション」ですが、ヴァシヤノヴィチ監督は「アトランティス」を作った後に「リフレクション」を撮りましたが、私は「アトランティス」に比べると面白味が少ないと思いました。「アトランティス」に比べると「リフレクション」はより直線的な戦争映画になっていて、敵もまた複雑な人間であるということが見えなくなっています。しかしこれは戦争という状況下では当然だと思います。戦場において

は、敵は絶対悪だからです。ただ、同時にこの映画は、自分自身の感情や行動を分析する内容にはなっていて、ただ単にストレートな戦争映画ではありません。単純に直線的な戦争映画になっているのは最近のロシアの戦争映画です。

—— 昨年、「第 9 中隊」(DVD 等の邦題「アフガン」、劇場未公開、動画配信サイトで視聴可) という映画を見ました。ソ連時代のアフガニスタン戦争を描いた作品ですが、これはロシアのプロパガンダに沿った映画でしょうか？ ドーリンさんはどう見ておられますか？

ドーリン 「第 9 中隊」は 2005 年に作られた映画で、フォードル・ボンダルチュク監督の初めての大作映画であり、プロデューサーのアレクサンドル・ロドニャンスキーにとっても大きな作品でした。ロシアの映画界におけるブレイクスルー的(突破口的)な作品です。「Bad Russians」という本で、私はこの作品のことも詳しく書きました。

私のこの映画に対する見方ですが、複雑な二つの考えが同時にあります。最初にこの映画を見た時、私はとても気に入りました。その理由の一つは、これはアメリカで制作されたベトナム戦争ものの映画のフォーマットを、きわめて巧みな形でソビエトおよびロシアの題材に適合させたものであると考えたからです。例えば「プラトーン」(オリバー・ストーン監督、1986 年)、あるいは「フルメタルジャケット」(スタンリー・キューブリック監督、1987 年)といった作品の構成や形に大変よく適合させた映画だなと感じました。

この「第 9 中隊」という映画は、国が発注をして作られたものではありません。当時のロシア国家は映画がこれだけの影響力を持つということを理解していなかったため、国が映画制作を発注するようなことはまだ行われていなかったのです。ですから、この映画は純然たる商業映画であり、そして非常に大きな商業的成功を収めました。

しかしながら、この作品はアフガニスタン戦争を映画制作陣がモデル化したものですが、アフガン戦争を題材としてどう扱うかというその姿勢は、現在の地点に立って見ると、非常に驚愕すべき預言的な要素を持っていると私は思います。どういうことか？ 登場人物たちは、ルサンチマン(怨念や憎悪)の塊であり、自分の行動を反芻したり、自分たちの責任を問い直したりすることを一切しない作品であるからです。ソビエトはいくつもの戦争を行ってきたわけですが、過去の戦争に対してそうした態度であったからこそ、今回のウクライナ侵攻というものが可能になったとも私は考えています。

—— 私は数か月前に、三島由紀夫が監督・主演した「憂国」という映画を見ました。1966 年の作品です。この映画でとても印象に残ったのは、切腹シーンを延々と撮っているところです。実際にこの映画を作って 4 年後に三島は割腹自殺を実行したわけです。映画「憂国」から私が見て取ったのは、戦

争にも、生きていくことにも、三島は幻滅しているということでした。ロシアで制作された映画で同じようなものはあるでしょうか？

ドーリン 現在の日本映画を含めた芸術が進んでいる動きは、三島の動きとは正反対のものだと私は思います。たとえば、「ゴジラー 1.0 (マイナスワン)」という映画ですが、これは自殺を英雄化するのとは真反対の映画です。また、宮崎駿の最新作「君たちはどう生きるか」(2023 年 7 月公開)を例として挙げることもできます。人の命、人間の価値というものは非常に尊いというのがこの作品の一貫したテーマです。

奇妙に感じられるかも知れませんが、ロシアの映画界にも「憂国」と同じような例として挙げるができる作品があります。昨年のカンヌ映画祭にキリル・セレブレニコフ監督が英語で撮った最初の作品を出品しました。「リモーノフ」(英語名『Limonov: The Ballad』)という映画です。これは詩人であり政治家であった実在の人物エドワード・リモーノフ(1943-2020 年)の人生を描いた作品です。

セレブレニコフは、リモーノフを「ロシア版ジョーカー」、あるいは「ロシア版三島由紀夫」と公言してはばかりません。つまり、ゼスチャー(振る舞い)の美しさ、理念の美しさというものが、人の命よりもはるかに勝るという考え方。行動や理念をロマンチック化し、英雄化する、詩的なものの見方です。セレブレニコフによると、まさにそのようなものの見方、考え方というものが、現在のウクライナ侵攻という悲劇の根本にあると考えられます。

—— ロシアのインディペンデント映画とドキュメンタリー映画についてお聞きします。昨年日本で「グレース(Grace)」(イリヤ・ポヴォロツキー監督)という映画が公開されました。撮影機材の高性能化と小型化で、ロシア国内でもドキュメンタリー映画やインディペンデント映画がたくさん作られるようになってきているのではないかと思います。現在の状況を教えてください。

ドーリン 現在のロシアにおいて、インディペンデント映画は大変リスクなものですが、自己資金あるいは投資家の資金で作家主義映画を撮る人はいます。しかし内容を見てみると、チェブラーシカよりもっと現実逃避的です。「この映画は、現実社会の真実を語る、誠実な映画である」と言いながら、最も重要な問題を回避する時、つまり検閲や戦争、暴力や抑圧というものを回避する場合、それはおとぎ話よりさらに現実逃避的になってしまうのです。

逆説的ですが、ブロックバスター映画で誠実に語る場合、例えば「巨匠とマルガリータ」ですけれども、インディペンデント映画で語るよりもむしろ語りやすいという状況が起きています。

というのは、ブロックバスター映画には、現実をストレ

トに映さない、迂回して曖昧な形で物事を語るというやり方が、そもそもジャンルとして存在しているからです。しかしそれが作家主義映画になると、そのようなやり方は単なる自己検閲、あるいは単に勇気が足りないことの証明になってしまいます。

映画「グレース」ですけれども、この作品も 2023 年のカンヌ映画祭に出品されて上演されたのですが、ロシアというものは観客の誰の関心も呼ぶことができませんでした。ロシアでは、今でも作家主義作品の制作が続けられていますが、その本数は年々減っています。その中でヒットしたものはほとんどありません。

——ドーリンさんはパパです。子供さんをお持ちです。私にも 6 歳の子供がいます。現在戦争が行われているわけで、だから私は子供を連れてロシアに帰ることができません。そのことを子供は理解しているとは思いますが、それと同時に、「人を殺すということは何でもない。この世にありふれたことだ」と、その 6 歳の子供が思っている現実があります。子供が読む本にも、テレビアニメやゲームでも、戦争や殺し合いごっこが溢れています。「戦争はいけない」「人を殺してはならない」ということを、どうやって子供に説明すればいいとお考えでしょうか？ これは今やロシアではやってくれない教育ですが、ドーリンさんの考えを聞かせてください。

ドーリン 素晴らしい質問をありがとうございます。一見すると、単純でナイーブな質問と思われるかもしれませんが、実のところ相当に難しい複雑な問いかけです。

人間の文化というものは、建設や創造とともに暴力や破壊からも成り立っています。暴力が英雄的な行為として賛美されることがしばしばあります。この文化を変えるのは相当に難しい。変えるには時間がかかると思います。もしかすると、未来には状況は変わるかもしれませんが。映画においても、その他の分野においても、女性が男性と同等の権利を持つ状況になれば変わるかも知れません。

私たち欧州の文化にとって、最初の作家はホメロスであり、最初の文学作品はイリアスです。これは戦争を賛美する作品であり、男性が男性のために書いた作品と言うこともできるかも知れません。日本の文学の土台となっているのは源氏物語です。つまり愛について語っている作品であり、暴力や死を賛美する作品とは全く異質のものです。しかしながら、日本という国が、後に残虐な帝国となり、多くの民族を抑圧し、暴力と残虐行為を英雄的な行為とみなす時代が訪れたことを、この源氏物語が阻止したわけでない。人類を改善することは、非常に難しい、困難なことです。

質問では、父親である私の体験についても触れられているので、こうお答えしたいと思います。

確かに子供は本も読み映画も見ていますが、しかしそういったことよりは、子供が実生活で直接目にしたり聞いたり

して体験することの方が、はるかに大きな力があると私は思います。お母さんであるあなた自身、そして子供の周囲にいる大人や家族たちが、実際に話すこと、実際に行動する内容こそが、(いわゆる文化というものよりは) 子供の人間としての土台になると私は信じています。

——私はつい先日、核戦争後の世界を描いたソ連の SF 映画「死者からの手紙」(コンスタンチン・ロプシヤンスキー監督 1986 年) を観ました。人を深く感動させるこういった作品が人間を変えることができないなんて、私には信じられないという思いがあります。しかし、現実には戦争が起きている。私たちの社会に存在する断絶、あるいは深い淵、そういうものに直面して私たちはどう行動すればいいのでしょうか。

ドーリン 私は、芸術作品というものが政治や人々の行動に与える影響について、それを過大評価したり、ロマンチック化しすぎたりしてはならないと思います。

では、芸術でなければ何が、私たちを自己破滅から救うのか。それはモラルであると私は思います。モラルというものは人それぞれの解釈がありますが、少なくとも文化よりはモラルの方が自己破滅から私たちを救う力は大きいと思います。なぜなら、文化の解釈は無限にあるからです。

しかし、芸術・文化というものが人間のモラル形成に役立ってきたことも事実であって、特に宗教が年々影響力を失ってきている状況では、この課題の解決には芸術の方がより多くの力を持っているのかも知れません。

——映画評論家として、今後ロシア映画とどのように向き合っていくのか、教えてください。

ドーリン 現在のロシア映画については、できる限り偏ることなく客観的に見ていきたいと思います。19 世紀のロシアの文芸評論家ヴィッサリオン・ベリンスキーは、「〇〇年のロシア文学概観」というものを毎年書いていました。

私は昨年、「2023 年のロシア映画界レビュー (概観)」という動画を公開しましたが、現在、「2024 年のロシア映画界レビュー」の準備を進めています。少なくとも一年に 1 回は、私がロシア映画をどう見たかを報告をすると同時に、その年の概観を人々に提示していく予定です。

※ **отчебурахнуть** ロシアの若者や兵士の間で使われ始めたスラングで、ロシア・ウクライナ戦争に関連して登場した新語。**чебурахнуть кого-то (по кому-то) / отчебурахнуть** — もともとは「倒す」「ぶっ飛ばす」「ひっくり返す」といった俗語的な意味合いを持つ言葉だったが、最近では軍事スラングとして「ミサイルや砲弾などで敵を攻撃する、壊滅させる」という意味で使われるようになっていく。語感的には「ドカンとやる」「ズドンとぶっ放す」に近い。チェブラーシカがこんな使われ方をすると、...。(了)